

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 349 回 「足るを知る」～分相応経営の薦め！

2010.1.31

2010年1月20日、英BBC放送はGDP(国内総生産)について、今年、中国が日本を抜き世界第2位の経済体になる見通しだと報じた。1968年、日本のGNP(国民総生産:当時は、今と違ってGNPで国家の経済規模を計っていた)は、当時の西ドイツを抜いて以来、実に42年ぶりに第2位から陥落である。

その代わりといったら不謹慎だが、米中央情報局(CIA)が世界126カ国・地域の対GDP債務残高比率を調べたところ、日本は172.1%(2008年概算値)で**世界第2位の「借金大国」**となった。日経新聞によると、第1位はアフリカのジンバブエで265.6%。これは最貧国というお国柄だが、G7(主要7カ国)の中でみると、イタリアが最も日本に近い5位、それでも105.8%。世界最大の経済大国である米国は37.5%で61位、日本の比率の高さは先進国で突出している。

あらゆる経済データを見ても、日本経済は本当に低減化・減量化している。更に、デフレ経済が蔓延し、企業も価格を引き下げのために必要以上の機能・品質を減らそうと努力している。こうした流れは日本で「**ニューノーマル**」と呼ばれている。

国際労働機関(ILO)の予測では完全失業率も6%になんなんとする中で、何とか雇用維持を確保する労働者ですら、実質年収は毎年減少し、企業に対するロイヤリティ(忠誠心)も大幅に失われつつあると述べている。

もはや、日本経済に対するイメージは全く変わったということに、気付くべきである。かつて日本は、世界経済を牽引する蒸気機関車といわれて、そのサラリーマンは「**エコノミック・アニマル**」と揶揄(やゆ)されてきた。殆んど貧しかった国民が、あっという間に経済大国にのし上がった。贅沢や浪費すら出来る余裕も持てた。「贅沢は敵だ!」と、必死に目指した先輩諸氏の高邁な思想や努力をすっかり忘れ、経済大国と言う名の元に胡坐(あぐら)を組み続けてきた。

GDP、このまま中国が順調に成長すると仮定すれば、8年後の**2018年**にはアメリカを抜き第1位になると予測されている。また、**2050年の予想**では、中国、アメリカ、インドの3カ国が突出して日本は第8位の順。しかも、中国のGDP総額は今の21.7倍、7,000兆円と、現在のアメリカGDPの5倍強を推定している(米ゴールドマンサックス社2007年)。日本経済復権のシナリオはどこにも存在しない。

もはや経済大国日本は、実質的に崩壊しており、高度経済成長なる思想や価値観は根底から覆(くつがえ)されている。前提が「毎年右上がりに経済成長する」という予測データ、昇給や賞与、退職金は必ず保証されるという幻惑、不動産至上主義による経済担保思想等にしがみつくなり、实体经济を正確に把握することは出来ない。企業評価も、売上高や資本金の巨額さ、従業員の多さ、支店・営業所の数等の成長規模視点から、**独創特異性、財務健全性、社会貢献性等への総合的評価の必然**が求められるかもしれない。

我々の目標や価値観も、有り余るほどの財貨の獲得を目指すのではなく、ほど良い価値の享受を目指し、健全性と社会貢献のできる、居心地の良い会社経営を目指すべきかも知れない。もはや死語になっている「**分相応**」の経営とでも言うべきか、今の時代だからこそ「足るを知る」こと、その見極めを経営に求め、「**吾唯足知**(われただたるをしる)」の実践を経営理念に掲げる時が来たのかもしれない。

「足るを知る者は貧しいといえども心は富んでいる、足るを知らぬ者は富めりといえども心は貧しい」。経営する以上貧してはならないが、無節操な、無限なる成長欲望を自制し、分を弁(わきま)えることの大切さを、この時代の日本経済に求められているような気がしてならない。